

【第3部】 パネルディスカッション  
「光都の20年とこれから  
～より輝くまちに向けて～」

■コーディネーター

佐竹 隆幸（関西学院大学専門職大学院経営戦略  
研究科教授・兵庫県立大学名誉教授）

■パネリスト

角野 幸博（関西学院大学総合政策学部都市政策  
学科教授）

太田 勲（兵庫県立大学学長）

西村 友宏（光都21自治会会長）

長谷川香里（納屋工房主宰）

石井 孝一（兵庫県公営企業管理者）

司会

ただいまから、第3部「光都の20年とこれから  
～より輝くまちに向けて～」と題しまして、パネル  
ディスカッションを開始いたします。

パネリストの皆様をご紹介します。

まずはじめに、本日のコーディネーターの関西学  
院大学専門職大学院教授・兵庫県立大学名誉教授の  
佐竹隆幸様です。

関西学院大学総合政策学部都市政策学科教授の角  
野幸博様です。

兵庫県立大学学長、大田勲様です。

播磨科学公園都市の住宅地「光都21」の自治会  
会長、西村友宏様です。

姫路でコミュニティスペース納屋工房を運営して  
おられます、長谷川香里様です。

最後に兵庫県公営企業管理者、石井孝一でござい  
ます。

ここからの進行は、佐竹教授によりしく願ひし  
ます。



佐竹氏

それではよろしく願ひします。

私たちのまちのこれまでとこれから、というこ  
とで20周年を記念しまして本日この様なかたちで開  
催していただいております、その最後がこのシンポジ  
ウムということでございます。

先ほど伊藤次長からお話がございましたように、  
残念ながらというか、元々は25,000人の住人に定  
着していただくということだった訳でございますけ  
れども、現在のところ夜間人口は1,400人です。  
しかし、昼間の人口は6,000人ほどを保持するこ  
とができるようになって、やはり交流していくことが  
非常に重要です。

そのひとつの、残念ながら集まらなかった原因に  
IT技術の進歩というのがあるわけですね。もうお  
分かりだと思いますけど、昔は研究施設があつて、  
その横に開発施設があつて、販売や管理するための  
本部拠点が来て、要するに全てが一緒にあることが  
ひとつの企業の強みであつた訳ですけれども、今残  
念ながら、研究資料というのは0.01秒くらいでア  
メリカにも行ってしまいますからね。同じ場所に集  
積する必要がなくなりました。それがこの20  
年間で大きく変わった。これ社会情勢の変化なんで  
すね。



でも、皆さんも、実際に行っていたら分か  
ります。今日、私は新しくなりましたサッカー場を  
拝見したんですが、一杯でしたね。こどもたちだけ  
ではなくて社会人の方々も。だから、土日は一杯な  
んですよ。新聞社の方は結構批判されているんです  
が、少なくとも土日はサッカー場は満員なんです。  
ということは可能性はまだまだあるということなん  
です。この光都そのものの過去と現在を検証し、未  
来を検討しながら、1時間少しの短い時間ですが、  
パネリストの皆さんと一緒に考えていけたらと思ひ  
ますので、よろしく願ひします。

5名のパネリストの皆さんには、まず自己紹介を  
兼ねまして、この光都との関わりについてご説明を  
いただければと思っておりますのでよろしく願ひ  
します。

まず角野先生からよろしく願ひします。

## 角野氏

角野です。よろしくお願いします。私自身は大学、大学院の頃から建築出身で、都市計画とかまちづくりを勉強しておりますので、この場所とは関係が深く、光都が生まれるその 10 年ほど前、つまり今から 30 年ほど前には、私は兵庫県庁の外郭団体のシンクタンクに勤めていました。そのときにこの西播磨地域で、相生市のまちづくりであるとか、上郡や旧三日月町、龍野、佐用の総合計画のお手伝いをさせていただく機会がありまして、ちょうどその約 30 年前は、西播磨の市町境のところにごいまちができるんだと、テクノポリスができるんだということを当然知っておりましたし、着工した当初、それに合わせて周辺のまちづくりをどうしていくんだというようなお手伝いをさせていただいていました。

その時分にはずいぶんこの周辺を動き回って、例えば先ほどの「かるた」にも出ていた三濃山などの元々ある資源をしっかりと見た上で、そこに新しいまちってどうやってできていくんだろうなということを考えてたのがつい 30 年ほど前ということになる訳です。



それ以来、まちづくりの形というのが大きく変わって来ているなど今日実感しております。

また、後ほどもう少し詳しく申し上げたいと思いますが、20 世紀のまちづくりでは、まず大都市に通勤するサラリーマンのためのベッドタウンといったもののニーズが高かったのですが、それではだめだということで、職住近接型のまちをいかにつくるかというような議論が出てきて、さらにその職については単なる工場じゃなくて、先端技術、研究開発といったものをテーマにどうやってまちがつくられていくのかということをやっと私の個人の経験のなかでも勉強してまいりました。

そして今、さらにその成果や経験を踏まえて、この光都の場合には今後どのようなテーマを掲げて、あるいは今までのテーマをどのように整理しながら、まさに本来の意味での 21 世紀のまちづくり、都市計画をやっていく、その実験場、20 年以上かけた

実験が今なお続いていってるんだなということも思っています。

ということで、後のディスカッションで、皆さんのお話を伺いながら、議論してみたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

## 佐竹氏

有難うございました。それでは太田先生、よろしくお願いします。

## 太田氏

兵庫県立大学の太田でございます。皆様方には、本学について日頃からいろいろとご理解、ご支援いただきましてありがとうございます。



私は姫路工業大学工学部、また旧電子工学科と、長いあいだ勤めていますが、1980 年に通産政策で、1980 年代の政策ビジョンとしてテクノポリス構想が打ち出され、それを受けて 1992 年にテクノポリス法が制定されました。それに前後して、全国各地にこういう高原地帯にテクノポリスをつくらうという流れができました。その中で、兵庫県も西播磨テクノポリス開発計画を出して 1984 年に承認されました。先ほどの伊藤次長さんのビデオの冒頭が 1984 年から始まったというのは、そういうことだろうと思っております。

その核として大型放射光施設が、今は SPring-8 と言っていますが当時は名称が付いておらず、そのような施設を導入して科学技術のメッカにしようという計画がありました。当時の姫路工業大学の学長にタンパク質の構造解析の第一人者がおられたんですが、その放射光施設の誘致で中心的な役割を果たされました。その結果、1989 年に西播磨への放射光施設の立地が決定したということです。

また、放射光施設の立地に並行して、そういう施設と連携できる学術的な機関がいるということになり、姫路工業大学に理学部をつくらうという動きがでてきました。理学部の設置にあたっては、まだ三濃山トンネルはできていないので、脇の山道をマイクローバスで学長に連れられて何人かで登って、建設



予定地に来た思い出があります。

1984 年くらいだったと思うんですが、当時の姫路工業大学の工学部の中に光学基礎研究所という部署を設けて、そこに 5 講座、15 人の先生が配置されましたが、今思うと、それが理学部を設置するという学長の伏線だったんだと思います。

1990 年に理学部が開設されて、その翌年の 1991 年に、兵庫県も非常に力が入っておいりましたので、建設費が当時 113 億円と聞いておりますが、それをかけて理学部の学舎ができたということです。

そうして、光学基礎研究所の全員の先生が理学部に移ってしまったので、その後でこられた山中学長が、これを復活させようとして、この会場の隣にある高度産業科学技術研究所を設置されました。

また、SPring-8 の入射機を使わせていただいて中型の放射光施設をつくらうということで、SPring-8 の横に本学の放射光施設ニュースバルができたという経緯がございます。

放射光施設 2 つもいらないじゃないかという意見もあるかもしれませんが、それぞれ役割が違いました、SPring-8 は重い元素からなる材質の解析、ニュースバルは軟 X 線ですので、軽い元素からできる、そういう材料の分析ができます。

現在、本学では、SPring-8 のビームライン 2 本とニュースバルを運用しており、世界でもまれな放射光の拠点になっております。そのハード X 線が SPring-8、ソフト X 線がニュースバルと、両方同時にワンストップで使える拠点となっており、先人の先生方の、先見性のある取組であると、非常に感銘を受けております。

また、山中学長が就任されたときに、やはりここは国際的な科学公園都市になるんだと。だから住民が定着するためには学校が必要だということで附属高等学校、これを姫路工業大学附属としてつらうと、そういう提案がございました。

私はそのころやっとなんか言えるような立場になっておまして、将来計画委員会の附属高等学校開設検討部会に出ておりました。どのような高等学校をつくっていくかということでございますが、国際性がある世界最先端の科学、やはり科学と国際がキーワードだということで、そういうマインドを持つ高校生を育てて、科学の心が分かって、国際性がある生徒を育てていこうということでございます。

しかし、学科をどうするかということですが、普通科だと当時は学区が限られておりました。それで、私はやはり全国学区にする必要があるんじゃないかということをお主張しておりましたが、それは県議会の先生のご理解も得られないというようなこともあったのかも分かりませんが、全県学区にしようということで、総合科学科という名称にしたという経緯

がございます。

そのような中で更に 2007 年に附属中学校も設置されました。このように、私は若いときからこの都市の建設をそばで見たり、直接関与してきたという経緯がございます。これからもひとつよろしくお願いいたします。

#### 佐竹氏

ありがとうございます。それでは光都 21 自治会長の西村さんお願いいたします。



#### 西村氏

西村と申します。15 年前に千葉からここに転勤してきて、今は県立粒子線医療センターでエンジニアとして働いています。転勤してきたときはたつの市に住んでおりました。たつの市でも、何もないと云ったらちょっと失礼なんですけども、なかなか生活に不便な所かなと思いつつながら 15 年前住んでいて、更に播磨科学公園都市に来ると…

#### 佐竹氏

千葉は都心におられたんですか。

#### 西村氏

千葉では、比較的都会の方に住んでいました。それに比べると、たつの市に 15 年前にいたときはスーパーマーケットとかも点々としかなくて、こういう所に住んだなと思いつつながら、播磨科学公園都市に来ると更にどんどん人気（ひとけ）がなくなって、ポツンと粒子線の施設があるような状態でした。

結婚して子どもが生まれたときに、職場の近くに家がほしいと思って、4 年前に家を買って住み始めました。

実際に住んでみると、いろいろないい所がたくさんあることが分かりました。自然が豊かであったり、空気が綺麗だったり、公園が多いということもあって、子どもが外で遊ぶ機会が多くなりました。たつの市で住んでいたときは、子ども同士が外で遊ぶというのが危ないとかもあって、そのような機会もな

かったんですけど、光都に来てからは子どもたちが外で元気に遊ぶようになって、そうなるのももちろん友達も増えていくわけで、光都という地区が安全で安心なまちということがよく分かりました。

そのような中で、今年は自治会長になりました。初めての自治会長なんで、何をやったらいいか分からないまま、こういう場に出ることになったりしました。僕自身もどうやってこのまちを盛り上げたらいいかなと思ってたんですけど、夏祭りやナイトパーティーに参加して、何か企画してまちの人に声をかけたときに、結構多くの人が集まるということが分かりました。

僕が住んでるところは光都の1期・2期で、そこは60世帯しかないんですが、3期・4期に声をかけ、他のところにも、オプトヒルズとかオプトハイツ、サンライフ光都にも声をかけて夏祭りをしたときは、約700人が集まりました。

ひとつひとつの小さなコミュニティがあり、そういうのをまとめるチームとかまとめるプロジェクトが今までなかっただけで、意外と声をかければ、大きな物事が成し得るのかなというのが今回分かりました。

少しでも光都のまちづくりに役に立てればいいなと思って参加しています。よろしくお願ひします。

#### 佐竹氏

ありがとうございます。それでは第1部でもお世話になりました長谷川さんからお願いいたします。



#### 長谷川氏

長谷川と申します。私は「つなぐデザイン」というテーマで活動しておりまして、姫路城が見えるビルの一室をコミュニティスペース・レンタルスペースとして運営しております。

この先端科学技術センターも貸し会場なんですけど、貸し室だけではなくて、そこに私のような運営の管理者がいて、ちょっとお節介をすることで、人や情報やいろいろなものが結構つながって行って面白い

ことが起こるということを実体験しておりまして、今年で10年目になりました。あまりにそれが面白いもんですから、人がつながる場の研究活動も始めています。大学で学術研究もやっております。

それから第1部でもご紹介しましたが、光都との関わりということですが、新たな場をつくるアドバイザーのような仕事もさせていただいております。ワークショップのコーディネーターですとか、光都プラザのテナント会さんのお勉強会なんかにも参加させていただいております。

第1部ではいろいろ発表させていただいたんですけど、皆さんがすごく楽しく参加されていて、みんな意見を出し合いながら進めているところです。

あともうひとつ付け加えておくと、私、太子町に住んでおりまして、ここは私からするとちょっとドライブに行こうかなという所とか、ちょっとしたデートとか、お食事とか、そういう感じでちょっと遊びに来るような場所として使わせていただいております。

ふらっと遊びに来る光都は、こうやって皆さんとワークショップをやってるのはずいぶん違う一面も見えてきてまして、そういったところもお伝えできたらいいかなと思います。よろしくお願ひいたします。

#### 佐竹氏

ありがとうございます。4人の皆さん方のお話を聞いていただきまして、石井管理者からお願いいたします。

#### 石井氏

皆さんのこのまちとの関わりをお聞きして、本当に皆さんにお世話になっているということに改めて感じました。

私は公営企業管理者ということで、県の企業庁というところの責任者を務めています。今年で2年目になります。企業庁とは、県のいわゆるデベロッパーみたいな所で、主な仕事は水道水の供給ですとか、大規模なまちの開発、また、開発したまちのにぎわい創出などがあります。それから太陽光あるいは水を使つての再生可能エネルギーの創出、新たな再生可能エネルギーの検討などをいろいろやっています。

それから施設でいいますと、淡路のウエスティンホテルや夢舞台を運営しています。それから加西市の青野運動公苑、ここはゴルフ、テニスやグランドゴルフなどのスポーツ振興に関する施設運営をしています。幅広くやっていますが、やはりこの播磨科学公園都市の関係では、このまちにどのようににぎわいをつくっていくか、あるいはどのように将来すばらしい、本当に住んで良かったというまちにしてい

くかということが今一番の最大の関心事です。

私自身の過去を少し振り返りますと、平成 13～16 年まで県立大学の統合の仕事をしてまして、その中で、附属中学設置の基本計画づくりに携わりました。ちょうどこの場所で、この附属中学のねらいとか、今後の展開などのご説明をして、住民の皆さんからご質問をお受けしました。



それから、平成 17 年に環境政策課長、そして平成 18 年に環境政策局長と環境関係をやってたんですが、環境学習をどのように展開するかという議論がありまして、この西播磨地区には非常に環境学習に先進的な事例がたくさんありました。自然のフィールドもすばらしく、また、熱心な方もおられました。ひょうご環境体験館の建物を整備するときになかなか計画どおりに進まなくて、国庫補助金を受けるために、環境省に行って夜遅くまで上層部と協議して、何とか国庫を確保できたということがありました。

そのような経験の中で、この 20 周年をいかに一過性ではないかたちで、将来につながるように展開したいと強く思っているところです。

### 佐竹氏

皆さんにひととおり、この播磨科学公園都市との関わりについてお話をいただいた訳ですが、ここからは本題でございます。

過去に様々な計画があり、大きな成果も上がっているんですね。SPRING-8 や SACL 誘致するということが世界的な大偉業でありまして、このあたりに住んでいると灯台下暗しで、どれだけ大きなことなのかということが分かりにくいですが、太田先生からご説明があったとおりです。

また、西村さんは I ターンになるわけですね。やはり兵庫県としては、地域創生ということからも、U ターン、J ターン、I ターン、特に別の所から来ていただくと非常にありがたい。そういう可能性を

秘めた播磨科学公園都市について、2 項目はシンポジウムの本題である、播磨科学公園都市に望むものや可能性などのご提案等々についてご発言いただきたいと思っていますので、よろしくお願ひします。

### 角野氏

播磨科学公園都市の現在というか、この 20 年を踏まえて、当初の計画やコンセプトが移りつつあるという状況を先ほどのプレゼンテーションでも拝見しております。

それで、そもそもの都市の本質ということから言うと、都市というのは要するに人が集まってくるところなんですけども、それは何らかの情報が発信されている所に情報を求めて行ったり、あるいはそこで情報を交換し、新たな情報を生み出すというのが都市の本質です。

その情報の質は金儲けの情報もあれば、学術・教育の情報など、いろいろな情報があるわけです。

播磨科学公園都市が、先端的な科学技術のインフラを備え、研究者を集中させながらも、更にそれを「まち」として育てて行くという中で、いま取り組んでいる、例えばサッカー場であったり、健康医療に関する施設だったり、健康、スポーツ、科学技術、環境といったものを読み込んだまちづくりということテーマにしているということについては、大きな時代の流れの中で、正に本来の意味での 21 世紀の都市づくりのテーマを、この 20 年間かけて模索しているのかなと考えています。これについては、都市というのは変化していくものであるという意味では賛成です。

そして、更に都市の本質という中で言うと、とにかく情報を求めて人がやって来ることを優先している。つまり、先ほどの言葉で言うと、昼間人口であったり、交流人口という言葉、そういう人たちがまずやって来てもらう、やって来てもらえるための情報発信の力を、あるいはやって来られた人たちが情報を交換しあえる力をまずつくるんだという意味でその昼間人口重視、こちらから始めよう、交流人口から始めようというのは、これは 21 世紀の都市の新しい姿であるとともに、本来の都市の形をです、ね、根源からもう一度たどってみようというプロセスとしては大変、私は応援したいという風に思っております。

そのために、土地利用計画を変更されたり、あるいはアーバンデザインなどの仕組みを 1980 年代にやっています。安藤忠雄や磯崎新、ピーター・ウォーカーといった方々など。また、渡辺誠さんというのは、これは実は私の研究室の先輩なんですけれども、西播磨の総合庁舎の設計をしておられますが、そういった一流のデザインというのも情報発信力で



あることに変わりはありません。

つまり、そういった人たちの作品、あるいはまちづくりに関する理念を学びに来たいという人たちも間違いなくいるわけですね。だから、ここへ来れば何か新しい情報が得られる、あるいはそこで自ら考えることができる。そして、大事なのはそこから自らが発信していけるという仕組みですね。今後ともこれは重視していく必要があると思います。

そうして、そういう訪れたい、訪れることに価値があるまちには、滞在するということが必要になります。その滞在する期間が、初めは日帰りから、1週間、3ヶ月、半年、1年、あるいは数年間、研究教育のためにというようなかたちで延びていき、それが定住していくためには、その住民を支えるためのいろいろな施設や機能が必要になります。まさにそれをいま着々と進められて行ってるということなんです。

ただ、20世紀のアーバンデザイン、都市計画のモデルは非常によく機能していましたし、それをベースにした都市は世界中にたくさんあります。しかし、人口が減少していく過程という意味での成熟過程における、あるいは環境と本気で取り組んでいくためのまちづくり、アーバンデザインの仕組み、あるいは人を集めてくるために適切なアーバンデザインというものもあると思うわけですね。

20世紀のアーバンデザインは、そこに住む人、そこで働く人のためであって、それはそれでしっかりつくられています。それをもう一歩進めて、もう一度、この播磨科学公園都市の誕生、成長を誘導するようなアーバンデザインのルールやガイドライン等を見直していく時期がそろそろ来ているんじゃないかなと。つまり、職住近接型の、職場と住まいに合わせたまちの形とか美しさということを超える、その次にあるデザイン。これは非常に大きいテーマだと思いますので、しっかり取り組んでいく必要があるのかなと思います。

もうひとつ。訪れる人だけでは、やはりまちにはならない。訪れる人がたくさんいる中で、その一部の人たちが住み始める、また、訪れる人たちをもてなす、迎えるために定住する仕組みが必要なわけで、その訪れる人と住む人、暮らす人とがしっかり協働できるような、協調してまちづくりに関われるような理念。最近ではシェアハウスとかシェアなんとかということが特に若い人たちの間ではやっていますけれども、ここでシェアタウンということを考える必要があるんじゃないか。つまり、訪れる人と暮らす人が、場所や機会をシェアできるようなプログラムを引き続き検討していく必要があるのかなと考えています。いまのところは抽象的な表現に留まってますけれども、その具体的な仕組みとか中身は、むし

ろ地元の人たちや訪れる方々が議論していただければと思います。以上です。

**佐竹氏**

それでは太田先生お願いします。

**太田氏**

先ほどの子どもさんがつくられた「かるた」に「SPring-8最先端がここにあり」というのがありましたが、やはりこのまちのまず第一の基本は世界最先端の科学技術基盤であるということ間違いありません。私が、造成中で泥だらけのこの場所を見学したのはストックヒルゴルフクラブが完成しかかっている時代でしたが、そこからSPring-8ができて、SACLAもできた。SACLAができたのもSPring-8がここに立地したからです。それでSPring-8を使って光合成の原理に迫るような研究成果があがったということで、もしかしたらノーベル賞をそろそろ取るかも分からないというような話もあった。やはり、そこは大事にしていかなければならない。



しかし、先ほどご指摘がありましたように、当時は想像ができなかった情報通信技術の発展が背景にあるわけですが、当時の想像を絶しております。当時は、SPring-8で実験するためには実際に企業が立地して研究しないとイケないだろうという想定だったんですが、今では、測定したデータをメモリーに入れて持って帰る、あるいは情報通信ネットワークでスーパーコンピュータ京に送って解析してもらうようなことができるようになってしまいました。すると実験をする間だけ来ればいいということで、それが1週間や1ヶ月程度になってきて、なかなか定住人口が増えないという状況にあります。

それを逆に言いますと、今、インダストリー4.0、第4次産業革命とか、あるいはソサエティ5.0。これはもうICT (Information and Communication Technology) の発展があって、産業構造、経済活動や社会システムそのものが変わろうとしていますの

で、この都市をどのように発展させるかというときに、この流れをどう活用していくかということが非常に重要になってくると考えています。

そのときに、ここにあるほどの土地が必要かどうかという問題もあると思うんですが、それはサッカー場を11面つくって、20万人くらい人が来てもらえるようにしているわけで、交流人口を増やしていくことは非常に重要だろうと思います。

また、平成32年度に鳥取まで播磨自動車道がつながるといいますから、鳥取や岡山から人を吸引するような仕掛け、ソフトを考えなければならない。東の方ばかり向いては決してダメなんで、そういうことを絶対にやっていかないといけない。

そのひとつが企業です。これは今となってはSPRING-8に関する企業でなくてもいいんです。今は地元の企業がたくさん立地しているんです。このように災害の心配をしなくていい、交通の要所にもなるような、こういう地点に企業を誘致する、今がチャンスなんです。

企業が立地すれば、西村さんのように従業員が、ここはいい所だなと思っていただいて住む人も増えるだろう、そのような吸引力を持つような仕組みをいろいろやっていく必要がある。

そのためにはこのまちを知っていただかないといけないので、サッカーというのは非常にいいところに目をつけられたんじゃないかな。今日もサッカー場を見学しましたが、多くの子どもたちが来ているのを見て驚きました。

新聞社の方は是非いいように書いてくださいね。

#### 佐竹氏

ありがとうございました。住んでいらっしやいますから、肌で光都を感じていただいていると思います。西村さんどうぞ。

#### 西村氏

はい。光都に住んでいてやっぱり一番良かったのは環境だと思います。静かで、空気が綺麗で、星も綺麗。やっぱり環境が一番いい。あと、安全に関して言えば、子どもたちが思い切り外で遊べる安全な環境はよかったです。

ただ、職場の同僚に「光都に住む気はないですか」と聞くんですけど、やっぱり「何もないんじゃないの」と返ってくる答えが多いです。自家用車でちょっと出ればスーパーもありますし、今はインターネットで買い物もできる時代なので、何もないということはないんだけどなって思いながらよく話をしたりしてます。

これは角野先生に質問したらいいのか分からないんですけど、都市っていうのは普通どれくらいで大

きくなるものなんですか。

#### 佐竹氏

角野先生どうぞ。どうぞせっかくでございますから。脚本とは違いますけど。

#### 角野氏

大きくなる必然性は必ずしもないと思いますが、例えばヨーロッパの中世都市は歩いて城壁まで15分くらいで行ける範囲というのが、市街化とともにどんどん大きくなってきた訳ですけども、ただ大きくなればいいのかということではなくて、むしろ大きくなることをどのようにコントロールするかということが重要です。

このような空間的な話のほかに、世代の問題があります。そこで何世代入れ替わっていけば、つまり次の世代に伝えていくことができれば、まちとして成り立っているかという意味では、まず3世代くらいは見た上で、まちを評価したいという気がします。

#### 佐竹氏

よろしいでしょうか。

#### 西村氏

ありがとうございます。光都住宅の1、2期に関しては結構年配の方が多いです。年配の方で、静かであったり、空気が良かったり、周りの景色がものすごく綺麗だったりする環境が気に入って引っ越される方がいらっしやいます。

そういう意味では、大規模スーパーマーケットなどができたからといって、それが理由で住民が増えるのかなとは思いましたね。先ほど発表してくれた子どもたちが大きくなったときに、まちがもうちょっと大きくなってくれば、それはそれでいいのかなと思いました。あまり急激に住民だけが増えても…。



#### 佐竹氏

逆に言うと、20年後、30年後に、せっかく楽し

んできたまちが無くなったらかわいそうなんですよ。

これはもちろんこの光都だけの問題ではなくて、兵庫県下のあらゆる所がその危機をはらんでいるのですが。まちが無くならないためには、大きくするのももちろん重要ですけど、その一方で、無くならないためにどうすればいいかということも考えたらどうかとは思いますが。すいません。口を挟んでしまいました。

#### 西村氏

まちが無くならないためにですね。それは考えてませんでしたね。

いま、まちづくりをやってて、いろいろな人が関わって来てくれていて、これだけ人が関わっているんだったら、もう少ししたらもうちょっと大きくなるんじゃないかなって思っていたのですが、それは僕がちょっと楽観的に考えてたのかも知れないですね。

#### 佐竹氏

住んでいる方の実感として、大きくなるんではないかという実感は非常に大きいですよ。

#### 西村氏

そうですね。定住しようと来られた方が光都から出て行くというのはおそらく少ないと思いますね。この環境を気に入って一回住んでみると、長くそこにいらっしゃるって方が多いのかなと思いますね。

一番初めの播磨科学公園都市に望むものということ言えば、今の環境は住民にとっては重要です。足りないものは確かにたくさん出てくると思うんですけど。

また、バスひとつにしても、たつの市は「あかねちゃんタクシー」という事業をしていて、これが結構便利なので活用しているのですが、情報がなんかあまりうまく回ってない。意外と光都の中でも「あかねちゃんタクシー」を知らない人が多かったりして、そのような情報がうまく回ってないのかなって思いますね。あと、外への発信があんまり周知されていないっていうか、そういうのはちょっと思ったりしますね。

#### 佐竹氏

ありがとうございました。それでは長谷川さんお願いします。

#### 長谷川氏

私は、この光都の皆さんとワークショップをやるにあたって、どうも住民の人はそういうことの温度が低いんじゃないかって言われていたりですとか、

第2部で説明があったように計画どおりにっていないというところも事前に聞いておりましたが、どうなることかなと思ってスタートしたのですが、先ほどの発表を見ていただいたとおり、すごく楽しく進めておまして、住民の皆さんとお話しますと、みんな楽しいことに飢えてみたいいな感じを受けています。

「まちのいいところを探しましょう」とか「どんなこととして過ごしたいですか」という質問に対して、「実はこんなことやりたいって思ってたんや」みたいな声がどんどんでてきたんですね。例えば、芝生広場でパーティをしたいとか、アーバンキャンプみたいなのができるじゃないかとか。先ほど子どもたちが発表してくれたような環境を生かしてこんなことやりたいっていうアイデアがすごくたくさん出てきたんです。

もうひとつ驚いたのは、住民の方は意外と満足度高いですよ。私は太子町に住んでいますが、そこと比べるとここは結構山の中で不便なんじゃないかなとか、大変だなんて思ってたんですけど、実際そんなことないですよ。住んでらっしゃる方がこの環境にすごく満足されているというのがよく分かりました。

ワークショップを進めて、第1部と一緒に発表させてもらった中脇さんが言ってくれた「アーバン里山」という言葉なんですけど、この光都のいいところのひとつで、自然環境と都市環境がすごくいい具合に共存しているというか、存在している場所だになっていうのを感じます。



子どもたちがつくってくれた「かるた」も、それが半々くらいに出て来てるんですけども、子どもたちは柔軟な頭で、大人の私たちが見付けられないようなおもしろいところを見つけてくれるんじゃないかっていう期待を持って「かるた」づくりをしたのですが、どちらかという大人よりもずっとフラットで冷静な視点を持ってたんじゃないのかなと結果を見ていて感じました。その自然と都市の環境のバ



ランス感覚がすごくいいまちなのかなと思っています。

もうひとつ、共存っていうのもすごくうまくいっていると感じています。多国籍のまちって「かるた」にも書いてくれたり、発表してくれたこともたちの中にも韓国の人や、ドイツとのハーフの子がいましたけども、そういった子たちがみんな同じように楽しく暮らせているまちだなということを感じました。

それに動物との共存という「かるた」もありましたが、自然環境との共存も考えながらうまくやっているんじゃないかなと感じています。栗拾いに行ったんですけど、栗の木が普通に、簡単に行ける所にあるって思ってたんですけど、この光都ではたくさんあるんです。近所にお住まいの人が既に取ってらっしゃったりして、そういう自然環境とか動物とかとの共存っていうこともできていて、新しいものを受け入れる環境が整っているなど感じます。私が住んでる太子の村なんかだと、ずっと脈々と受け継いでる何代も住んでるような人たちの中だと、「新宅さんやからねえ」みたいな感じで、新しく来られた方っていうのはなかなか輪に入り難い、気を使わないといけないみたいなのがあったりするのかもしれないですが、ここはそんなことがなくて、それは本当にいいところかなと感じました。

これからの期待や可能性という面では、24時間営業の利便施設があった方がいいとかのハード面の足りなさもないことはないと思うんですが、ワークショップなんかをやっていて感じるのは、ソフト面の足りなさ、人が集うような仕掛けとかきっかけっていうのがなかったんだなって感じていますので、そのようなきっかけをつくる必要があると思っています。

最後に、先ほど角野先生が都市の本質の話をされましたが、やっぱり人が集まるとか、集うっていうことはすごく重要なことだと思っていまして、大きな都市だと、例えば駅とか広場とか、必ず人々が使う場所っていうのがあって、そこを通過だけかもしれないですけど、人が固まる場所、集う場所っていうのがあると思うんですね。

この都市はいろいろな施設が比較的点在していて、そこを目的地にして行って、そこから帰ってしまうだけっていう方がまだまだいらっしゃるような気がするんです。ワークショップは光都プラザの空きスペースを使ってやってきたんですが、そういう誰でも来れるようなオープンな場所をつくることで、ふらっと訪れる人もそこに来て何かに出会えるような場所になっていけば、もっと可能性が広がるんじゃないかなと感じました。

## 佐竹氏

ありがとうございました。石井管理者、お願いします。

## 石井氏

私は、20周年記念事業をやって本当によかったなと思ってるのは、住民の皆さんに当事者として参画していただく場をつくったら、本当に熱心にやっていただいて、それで夏祭りはできましたし、ジャズフェスティバルができたっていうのもあるんですけど、何より嬉しかったのは、それを継続して実施していこうというグループができたことです。一過性でイベントをするのならいろいろな形でできると思うんですが、そういった祭りをいままでしたことなかったこのまちで、これを継続してやっていこうという、そういう機運ができたっていうことは、すごいことだと思ってるんです。

逆に言えば、なぜ今までこういうことがうまくできてなかったのかなと考えてみたんです。

やはり行政区域が、1市2町にまたがっていて、その行政から提供される情報もそれぞれがばらばらなんですよね。だから情報を共有できていないということが結構あると思います。



また、自治会も分譲工区ごとに存在していて、全体の連合自治会みたいなのがなかったり、それはおそらく市町区域をまたがってしまったことであってできていないのかなと感じたんですね。

だけど、こうやってひとつのテーマで一緒にやろうと言うと、その市町の区域に関係なく人は集まって、このテクノのまちで一緒になんかやりましょうって機運がまとまる。その土壌、また、人の先進的な取組に対する理解とかいうのも非常にあるまちなんですよね。祭りをしたら外国人の皆さんも集まってくれたりとか、国際的なカラーがさっと出るような、そういうまちであると。

だから、それは我々行政側の運営方法にもやっぱり問題はあったんじゃないかなと思います。いろいろ

ろとハードはつくるけれど、それが一体感を持ってこのまちがまとまってきたのかなと考えたときにですね。例えばサッカー場で試合をしに来た子どもたちは、サッカーが終わったらすぐ都市外へ帰っていく。企業の従業員の皆さんは、企業活動が終われば、さっと地元へ帰っていかれる。住民の人は住民の人で、そういう取組はまた麓からやってきた人がイベントやってるわみたいな感じで割と冷めて見てるといふようなところがあつたりしたのではないかなという感じも受けました。

まちづくり協議会に私が直接行ってお話をした中でそのように感じたので、「お互い知り合うような取組をしませんか」ということで、ふれあいの祭典に自治会が連合でブースを出してくれたり、立地企業がこんな取組してますよっていうことをブースで発信してくれたり、つまり、お互いが知り合うという、なんかきっかけみたいなものが生まれたのかなと感じました。

それから、そのようなグループの皆さんが、まち全体をジャズや文化であふれるようなまちにしたいとか、あるいはこうやってみんなで一堂に集まってやれるような祭りをやってみたいという機運がでてきたというのは、本当にすばらしいことだなと思います。



そのため、我々行政側ももう少しうまくいきやすいような仕掛けをつくっていくべきではないのかなと感じています。

播磨高原広域事務組合という団体があって、横断的に基礎的な自治体の事業をする役割を担っていたのですが、今は学校の運営や上下水道など特定の事務に限られています。

まちのにぎわいや地域振興については市町が直接それぞれ縦割りの格好になってしまっていて、このまちの一体感をつくっていくこうと思えば、そこをひと工夫していく必要があると感じました。

また、行政としては、まち全体では第1~3工区全体の人口25,000人という元々の計画規模でつく

られていますので、インフラのうち結構課題になっている部分が見えにくいですがありまして、これからのいろいろなインフラが老朽化していく中で、そのインフラ部分をどう維持していくのかという問題があります。

現在は第2・3工区は着手しておりませんが、今後どうするかははっきりしていないにも関わらず、今はそれに見合うだけのインフラを維持している部分もあります。

例えば、水道用水なんかは、整備した能力のうちの何分の1かしか使っていません。水源も2系統用意していますが、いざというときのために複数を維持する必要があるということは理解できますが、これらが本当に老朽化してきて、維持管理をしていくときに、その2つが本当に維持できるのかということ、われわれは考えていかなければならないと思っています。

まちが前向きに発展する要素はいろいろな面で見えてきますし、整備の必要性みたいなこともいろいろ出てくるだろうと思っています。

例えば、SPRING-8で泊まりたい研究者の皆さんが泊まりきれなくて、相生のホテルに泊まられているという話もありましたが、ホテル事業者の皆さんがテクノにホテルを建てる余地はあるのかといった話が聞こえてきたり。

あるいは、学生や研究者の皆さんが夜に活動しているんだったら、コープが8時で閉まるのなら、夜の対応をするためにやっぱりコンビニが欲しいということが現実にあります。あるいはコンビニ側からも、一度検討してみたいという声もかかってきたりしています。

サッカー場も、利用客が年間で20万人の予想ですので、昼間人口だけでも、ひょっとしたらコンビニさんの目で見れば店舗を開設するに足りる場所と映っているかもしれません。水面下では、このまちの交流人口の増加ですとか、多くの研究者の方々がこのまちから溢れて他で泊まってるという実態を踏まえて、民間でいろいろな検討をされていますので、われわれとしてもアンテナを高くする必要があるかもしれません。

それに加えて、先ほど、角野先生が言っていたように、20世紀型のアーバンデザインが非常に規制が強い状態であるならば、21世紀型の、つまり人口減少社会を迎えて、まちのにぎわいを盛り上げる必要性が高くなっている時代における規制の見直しということも検討していかないといけないかもしれません。

今日はとてもいいご意見をいただきましたし、それから、子どもたちがここに住んで、いいまちだと本当に感じてくれていることにはすごく勇気づけら

れました。だから、あのこどもたちの将来のためにも、このまちをもう少し利便性を高めてほしいなどの声は、ちゃんと我々大人がやれることはきっちりとしてやっていかなければいけないと思いました。

#### 佐竹氏

ありがとうございました。最後に手短かに、光都に今後望むもの、可能性、それから方向性、展望のご意見をお聞かせいただきたいと思います。

また角野先生から、お願いいたします。

#### 角野氏

今日の話をついて、またこどもたちの話を聞いて、住んでいる人たちはこのまちにすごく誇りを持っている、愛していることは実感できました。

そのまちへの誇りや愛着を、訪れる人たちにも持たせていただくような仕掛けができないか。こちらで研究されてる方、スポーツをする方、そういった訪れる人々が、この光都に誇り、プライドを持てるような仕組みづくりが必要だと思います。そのためには、いろいろな形で、このまちの資源や活動や情報をシェアしていくような仕掛けがあるだろう。

そして、もうひとつ忘れてはならないのは、地元由市町の、要するに光都の周辺に住んでおられる、旧集落って言うていいのかわかりませんが、現在の市街地に住んでおられる方々にとっても、この光都が誇りになるような、あるいは一緒にシェアできていくような仕組みを是非考えていただきたいというよりも、一緒につくっていく必要があると思います。



それから最後ですが、光都の学校で育ったこどもたちが2~30年経って同窓会をすると思います。

私は各地でニュータウンの再生に携わっているときに、その原動力になるのが同級生だった人たちが、いろいろな仕事についている人たちが「一緒になんかやろうよ」「そういえばお前と同級生やったな」というかたちで活動に入ってくれるところを実際

に見ています。そのパワーは極めて強く、また長続きします。そのタネがもうすでに今日のこどもたちの中に埋め込まれているんだなということを思いましたので、是非それを意識していただきたいと思います。

#### 佐竹氏

太田先生、お願いいたします。

#### 太田氏

今日発表したこどもたちにとってはこのまちが故郷ですから、故郷が消えるとかどうとかという話がありましたが、そういうことは決してあってはならない。

放射光施設のことばかり言って申し訳ないんですが、SPring-8はグレードアップする予定ですから、20年はまだ続くということですね。それから、SACLAはできたばかりです、ですから、それを大事にしていかなきゃいかん。

しかし、先ほど管理者からお話があったホテルですが、来年に県立大学が放射光学会を主催することになってるんですが、播磨科学公園都市では泊るところがなく、やはり姫路の工学キャンパスでせざるを得ない。

もしホテルが建つと夜間に人がいることになりまうから、コンビニの需要がでてくる。夜間人口が300人減った原因は寮生がいなくなったからだという話でしたが、あれは、寮から歩いていける距離にコンビニがないから嫌だという学生が結構いると聞いていますので、学生も戻ってくる。そうすると正のスパイラルで、どんどんいい方向に展開していくんじゃないかなと思っています。

また、今日のこどもたちの発表を聞いておると、生活環境、コミュニティの空間に余裕があると思いました。すぐ家のそばでキャンプができる、花火ができる。これをもっと広げて都市部のこどもを呼び込むようなこともできるのではないかと思います。

それからツアーです。伊藤次長のプレゼンで、3回実施したがすべて満員だということですが、私も様々な産業支援機関からSPring-8を見たいとかニュースバルを見たいので紹介してほしいと言われる。ということは、そういう需要が非常に多いわけで、一般の方にもあると思いますので、それをもっと積極的にやっていくということが必要ではないでしょうか。

それから、ここに人を集めるような施設があればと思います。それはやはり科学技術、光のまちですから、光の科学館といいますかね。放射光は目に見えない光ですが、目に見える光もあれば、通信に使



ってる電磁波も光です。星の光もあります。佐用には本学の天文台があります。星がきれいとか「かるた」でもありましたね。光の科学館のような施設ができれば、科学的な匂いのするまちとして、交通網も整備されるということもあるので、人がどんどん集まってくるんじゃないかなという期待を持っています。

#### 佐竹氏

それでは、西村さんお願いします。

#### 西村氏

これまでのお話をお聞きして、ひとつは交流を大事にした方がいいと感じました。夏祭りにしてもふれあいの祭典にしても、確かに住民の方も、大学や企業と交流を持てる場というのは今までなかったんですよ。

今回、夏祭りやふれあいの祭典、それからグランドゴルフ大会もいろいろな方と触れ合ってもものすごい楽しい行事になりました。住民もとても喜んでいて、来年もやって欲しいという声も聞きました。企業の方も、住民はこんな感じなんだなっていうのを知ってもらえれば、ひょっとして定住していただけるきっかけになるのかなと思いました。

あと、先ほど言われてたように、確かにコンビニが無いっていうのは住民からよく聞いていて、コンビニにはあったほうがいいよねってよく言われたりします。コンビニの役割は、モノを買うだけじゃなくて、荷物の受け取りだったり公共料金の支払いだったり、多様なニーズにコンビニが対応できるので、夜間でも利用できたら便利だよねっていう声を聞いたりしています。そういう意見を取り入れつつ、今後、うまく生かせたらなと思います。ありがとうございます。

#### 佐竹氏

ありがとうございます。長谷川さんお願いします。

#### 長谷川氏

ワークショップなどで生まれた新たな動き、それからグループを大切にすることが本当に重要だと考えています。

ソフト面というのはなかなか評価がしづらいとか言われたりして、大事にしてもらいにくいところがあると思うんですが、やっぱりみんなが楽しいとか、このまちが好きって思えることっていうのが、まちの魅力の核になると思いますので、大事にしたいと思っています。

今回はワークショップを空き店舗で実施してきましたのですが、そこをオープンするとか、交流拠点にしたいだったりして、みんなの動きをもっとサポー

トでできるようになればいいかなと思います。

それから、こどもたちが発表した「かるた」は「まちの미래のタネ」だと思いますので、こどもたちが見つけたものとして、大人もこどももみんなで育てて行くべきかなと感じています。

最後に、情報発信についてですが、まちが好きとか、ここがいいよということを伝え切れてないと思いますので、特にこの「かるた」といういいツールがあるので、もっとどんどん伝えていけたらいいのかなと感じています。

#### 佐竹氏

石井管理者、お願いします。

#### 石井氏

これまで点で整備してきた施設を、いかに面として広がりを持つように使っていくかということが大事だと思っています。例えば、オプトピアに、連携協定を結びましたASハリマアルビオンの選手情報の紹介とこどもたちのサッカーに関する相談ポストをつくりました。こどもたちがこれはどうしたらいいでしょうかと相談箱に入れますと、アルビオンの選手が答えを書いて返事してくれるという仕掛けがあります。それは何を意味するかというと、サッカー場に練習や試合に来たこどもたちが、帰りにオプトピアに寄ろうかと思って、まちの真ん中に迂回してくれる、人の流れをつくり出すきっかけにならないかというのが元々の狙いなんです。

ASハリマアルビオンと連携協定を結んだのも、もちろんサッカーを通じた地域づくりということもあります。例えば、広島市民が広島球団のものでひとつになったというスポーツの持っている大きな効果が、サッカーを通じてここでできないかなと考えています。このエリアは、少年少女のサッカーのメッカなんだ、なでしこリーグのサッカーチームが普段練習するようなすばらしい場所なんだっていうことで、それもひとつの誇りになって来るんじゃないかと思っています。

今回のような住民主体の活動が続くような、そういう拠点的なものは必要ですが、それは行政が少しサポートする領域だと思いますので、何とかできないかなと思っています。

このまちは開発してつくったまちですので、どうしても昔からある村落のように古いコミュニティやつながりが無いというのは事実です。それが逆に、国際的で開放的な雰囲気を生んで、ウェルカムの風土をつくっているところもあります。一方ではコミュニティがひとつにまとまり難いという状況になってしまっているかもしれません。

県や市町などの行政や、まちづくりの責任者とし

での企業庁が、そこをきっちり踏まえながら、これからこのまちがもっと成熟化して、すばらしい、子どもたちにとっても誇りになる、より輝くまちになっていくように努力していきたいと思えます。

## 佐竹氏

どうもありがとうございました。

ここは光る都、光都ですよ。光る都ですから、この地域の強みというのをまず見つめ直そうというのが、ここのパネルディスカッションのひとつの主旨だと思っておりました。



やはりこの地域の強みというのは、世界最先端の科学技術の拠点であるということなんです。SPRing-8 であつたり、SACLA であつたり、県立大学の理学部であつたり、粒子線の治療施設であつたり。これらが集積しているんですね。

兵庫県は、第4次産業革命の中で、今後の戦略産業として、例えば高度組立、航空機などの高度組立産業であるとか、エネルギーであるとか、ライフサイエンスであるとか、AI、IOT なんかを進めていきたいと思います。十分その拠点になり得る要素がここに集積している。これはひとつの大きな強みなんです。

太田先生もおっしゃいましたが、IT 革命の中で企業の集積が弱くなってきた。弱くなってきたけれど、科学技術の集積というのは変わりません。そうすると第二段階として課題が今回いくつか、何人かの先生方の中でいくつか抽出されて来た訳ですね。コンビニがないということは、住んでおられる方、あるいは私は大学におりますので学生の気持ちになってみたらですね、「晩に腹へって飯食いたくても買うところがないで」というのは問題ですね。確かに車で 10 分ほど行ったらコンビニはあるのかもしれませんが、それは大層な話ですので、自転車ちょつといける範囲内にコンビニがあるのは大事です。管理者がおっしゃったように身の丈にあった計画に変更するということですね。第2工区、第3工

区がありますが、基本的には第1工区をベースにして、過度なインフラがどれだけあるのか、ないのかというのを検証する時期が来ていると考えます。

神姫バスさんのおかげで基本的に公共交通機関というのは増加傾向にあると。都会の感覚からしたら 10 分というのは長いと感じられるかもしれませんが、10 分毎にピストン輸送すると非常にインフラとしては充実していると。

それに加えて、従来の計画に見切りをつけて、サッカー場と太陽光発電を新しい方向性として採用して成功している。

そのような中で、更なる今後の光都を考えたときに、皆さんがた、子どもさんのことも含めて地域に対する誇りですね。新しいまち、シビックプライド、地域愛と言ったほうがいいのかもしれませんが、地域愛を 10 年、20 年、30 年の間にどれだけ育てていくことができるのか。

古い部落や村社会的な地域コミュニティが元々ここに存在しませんでした。加えてたつの市、上郡町、佐用町の 3 つの基礎自治体にまたがった地域ですので、なかなかセクト主義のところもあつて、情報伝達もうまくできていなかった。だからコミュニティづくりというのが非常に大きな問題でした。1,500 人だったら全員が顔見知りになるんじゃないですかね。

私は中小企業地域振興が専門なんですが、ソーシャルキャピタルといいましてね、日本語に訳すと社会資本なんですけど、従来、社会資本というのは電気とかガスとか水道とか道路とかのいわゆるインフラのことを言っていたんですが、これから、利益を生み出す源泉は、人と人、人と地域、人と大学、人と行政を結ぶ信頼関係であると。信頼関係がないところにお金は流れない。これは里山資本主義といいまして、藻谷さんという有名な人が唱えていらっしやいます。ここが里山かどうかは別として、この地域を活性化させるのにひとつの重要な要素は、やはりソーシャルキャピタルの形成だろうと考えます。

だからコミュニティの形成というより、まずプラットフォームですね。出てきてもらう場をどうやって作り出すか。だから夏祭りが成功したし、ジャズフェスも成功しました。最初聞いたときにびっくりしたんですよ。こんなところに人が来るんですか。でも実際には結構多くの人がかられたというのは、いわゆるプラットフォーム、場ができてるんですよ。そこで、交流ができてるんですよ。情報を収集し、情報を発信することができてるんですよ。それを 5 年、10 年、20 年蓄積していくと、まだまだこの地に可能性があるのではないかと。パネリストの皆さんのご発言を聞かせていただいた帰結でございます。

今日はどうもありがとうございました。

#### 司会

ありがとうございました。

それでは、以上で第3部を終了させていただきます。コーディネーターの佐竹教授、パネリストの皆様、本当にどうもありがとうございました。

いま一度、盛大な拍手をお願いいたします。



#### 【閉会挨拶】

#### ■挨拶

遠山 寛（播磨高原広域事務組合管理者  
（上郡町長））

年末の大変お忙しい中、長時間に渡りましてシンポジウムにご参加いただきましてありがとうございます。

私どもは途中からの参加になりましたが、本当に貴重な意見をたくさんいただきました。

このシンポジウムのテーマでもあります「より輝くまちに向けて」、皆様と一緒に歩んでいきたいと思えます。

本日は大変ご苦労様でした。

